

肢体不自由児への主体的な取り組みを促す動作学習の指導実践

松尾晴日^{*1}・本吉大介^{*2}

Attempting to promote a student with physical disability proactive attitude in self-reliance activity

Haruhi MATSUO and Daisuke MOTOYOSHI

(Received October 1, 2023)

Abstract

This study aims to implement and evaluate self-reliance activity for a student with physical disabilities, based on the concept of fostering independence in their activities. The purpose is to consider strategies for instructional planning and support that enable the target student to actively engage in learning activities. The subject of this study is a male student with cerebral palsy who are in the 6th grade and enrolled in a special support class at an elementary school. Over the course of 12 sessions of self-reliance activities, various tasks were undertaken to improve walking performance, including tasks related to ankle relaxation, maintaining a kneeling posture, and walking. Over these 12 sessions, improvements were observed in the subjects' ability to maintain a kneeling posture and his walking performance. While in the midst of self-reliance activities, it was noted that the student had previously experienced anxiety and a decrease in motivation when faced with difficult or new tasks. However, he exhibited a willingness to take on new challenges. Additionally, he showed an inclination to understand his own body's state. Notably, he not only engaged in self-reliance activities during the sessions but also demonstrated motivation to work on movement-related tasks at home. As key points for this success, it was concluded that : 1. Explanation using words and videos to ensure that the tasks are understood by the children. 2. Accumulating successful experiences. 3. Establishing communication and creating a positive learning atmosphere are crucial in the process of self-reliance activities.

Key words : physical disabilities, Dohsa-hou, self-reliance activity, case study

I. 問題と目的

1. 肢体不自由の特徴

肢体不自由は、中枢神経や末梢神経の障害、筋肉の病変、形成不全や欠損などを原因とする運動障害である。肢体不自由に起因して生じるその他の困難については、コミュニケーションや社会性の発達についても示されている。肢体不自由児のコミュニケーションに関して、徳永（2018）は、「話し言葉や書き言葉は理解可能であるが、発声や書記などの表出や表現に困難がある場合、知的障害を重複しており

言葉や文字が理解できない場合」のように大きく2つのパターンを述べている。肢体不自由児の社会性の発達については、安藤・藤田（2015）が「肢体不自由児の多くは、乳幼児期から学齢期に至るまで養育者の介助を受けることが多く、学校に入ってから教育者の介助を受けるようになる。一人で何とかやれる場合でも時間がかかってしまうため、大人が介助してしまうことが多くなる。この繰り返しは、年齢に応じた社会的スキルを学習する機会を奪い、自分が決定し行動するという経験が減少し、肢体不自由児の社会性の発達を阻害する」と述べている。このように、肢体不自由児への教育を考える上では、運動発達面に限らず、コミュニケーションや社会性の発達についても考慮する必要がある。

*1 熊本大学大学院教育学研究科院生

*2 熊本大学大学院教育学研究科

2. 肢体不自由児への動作法

上記のような障害特性がある肢体不自由児への指導法として動作法がある。動作法とは、動作課題を通じて動作不自由の改善と心身の活性化を目的とした日本独自の心理療法（成瀬，1995）を指し、「動作法」、「臨床動作法」、「心理リハビリテーション」と呼ばれている。

中井・高野（2011）によると、肢体不自由児に対する自立活動の理論・技法の種類は多様であるが、動作法は自立活動の指導で最も多く活用されている。このことから、自立活動では動作法（以降、本研究では動作学習と表記）の考え方や技法を応用して、肢体不自由児の身体の動きの学習に取り組んでいることがうかがえる。

3. 自立活動の考え方や動作学習

動作法の対象は発達障害児や心理的に不適応な状態にある子どもなど幅広い。その目的は、姿勢の改善を図るにとどまらず、支援者と一緒に体を動かしたり緊張を弛めたりする体験を通して、自分の行動を自分でコントロールすることをめざしたり、他者との関係を築いたり深めたりすることにある。

肢体不自由児の生活機能が向上し効果的に社会参加ができるようになるためには、周囲の環境が整えられていくことも重要であり、加えて環境に働きかけていく主体性を高めたり、自分の動きや代替手段で対応できることを広げたり、コミュニケーションによって支援者との関係を良好にしたりすることも必要であると考えられる。

このことに関して、特別支援学校教育要領・学習指導要領解説自立活動編（幼稚園・小学部・中学部）には、「児童生徒自身が活動しやすいように環境や状況に対する判断や調整をする力を育むことが重要であることから、個々の児童又は生徒に対し、自己選択・自己決定する機会を設けることによって、思考・判断・表現する力を高めることができるような指導内容を取り上げること」が示されている。

このように、自立活動の考え方を踏まえると、動作学習中の展開やコミュニケーションを工夫することによって、自分の身体のことをはじめとする自己への理解を深めたり、支援者とコミュニケーションスキルを高めたり、コミュニケーションをとることへの肯定感を高めたり、成長の実感や成功体験を積み学習への意欲を高めたりすることによって、学習活動に対する主体性を育むことが重要であると考えられる。しかし、その指導計画及び具体的な授業計画に関する情報は限られている。

4. 本研究の目的

以上の経緯から、本研究では肢体不自由児に対して自立活動の考え方に基づく動作学習を展開した事例について報告し、対象児が学習活動へ主体的に取り組むことができるような指導計画や指導・支援の工夫のあり方について考察する。

II. 方法（事例の概要及び指導計画）

1. 対象

対象児は、小学校6年生で特別支援学級に在籍している脳性麻痺（両麻痺）の男児（以下、A児）である。短下肢装具を装着し、移動は腕を使ってクラッチ歩行や手すりを使っている。衣服の着脱や排せつも手すりを使うなどして行うことができる。支援が必要な時はヘルプを求めることができる。コミュニケーションについては特に問題なく、しりとりやクイズなどの遊びの中で人とのやりとりを楽しむこともできる。

A児は、P大学で行われる動作学習会にX-1年度より参加している。P大学で行われる動作学習会に加え、A児が通っている放課後等デイサービスで週に2回、リハビリテーション病院で2週間に1回～月に1回、放課後等デイサービスの理学療法士を自宅に招いてのリハビリを月に1回の頻度で行っている。

2. 指導期間

X年6月～X年12月までの7か月間、P大学で週に1回行われる動作学習会において、約60分間実施した。A児が欠席することもあったため、7か月間で12回の指導を行った。（以下、各セッションを#を使って示す。）#1と#2は実態把握期、#3～#5は第一期とし、週に1回のセッションを主体的に取り組めるよう指導した。#6～#12は第二期とし、ホームワークを導入した。

3. 指導計画

(1) 実態把握

A児の実態について、自立活動の6区分に整理した（表1）。表1と#1・#2より、身体の動きについてはクラッチを使用しない歩行で股関節や足首のかたさから足を交差しながら勢いに任せて歩いていることが課題であった。

学習活動への関与に関わる主体性やコミュニケーション面について、痛みがある部分を触って、痛みの程度を5段階評価で支援者に伝えることを学習している。また「なんでこれをやるの?」と尋ねて

理解しようとする姿勢がある。そのため、動作学習の時間は指示に応じて取り組むことはできている。学習した動作の定着については学習機会を増やすことでより効果が見込まれ、家庭での主体的な学習が充実することが望まれる。

(2) 指導目標

(1)で示した課題より、身体の動きと主体性が関連する指導目標を設定した。身体の動きについてはA児と相談し、「膝立ち歩きを4歩できるようになる」を設定した。主体的な取り組みに関しては「課題の目的を理解し、意欲を維持しながら活動に取り組むことができる」を設定した。また、自分のことは自分でできるようになってほしいという保護者の思いも踏まえ、動作学習では膝立ち歩きと歩行を主軸として行っていくこととした。

表1：自立活動6区分からの実態把握

健康の保持
<ul style="list-style-type: none"> ・食事・睡眠等の生活リズムに問題はない。 ・疾患や障害については関心を持っており、動作学習の課題の意味を理解しようとする気持ちがある。 ・身体のケアやリハビリテーション、機能改善のための取り組みについて、関心を持っているが自己管理の経験は少なく、今後の成長が見込まれる。
心理的な安定
<ul style="list-style-type: none"> ・過度な不安を感じる様子はなく、情緒的には概ね安定している。 ・身体の動きの学習について意欲を持っているものの、できそうにない課題と感じると回避的になる。口数が減り、後ろ向きの発言が増える。 ・料理やスポーツなど色々なことにチャレンジしてみたいという気持ちがある。
人間関係の形成
<ul style="list-style-type: none"> ・人への関心や基本的信頼感が高く、人間関係の構築はスムーズである印象をもつ。 ・対人関係上のルールや遊びのルールを守ることができたり、他者に譲ったり他者を優先にすることもできるため集団適応は良好。 ・歌やダンスを積極的に披露する様子もあり、家族をはじめ多くの人に受け容れられる経験が多い印象。
環境の把握
<ul style="list-style-type: none"> ・感覚過敏・鈍麻はなく、痛みに対して過度に不安を感じたり、怖がったりして回避的になることはない。 ・斜視があり、歩行や階段などで影響する可能性が想定される。 ・動きに関係する自分自身の身体の状態理解については学習途上。
身体の動き
<ul style="list-style-type: none"> ・臥位姿勢からの起き上がり、寝返り、擦り這い、四つ這いなどの動きについては補助は不要。 ・坐位姿勢は上体が前傾するため、椅子座では姿勢保持のための補助具（机）を使ったり、胡坐では手を床に付けて身体を支えている。坐位姿勢から、膝立ち姿勢になったり、壁に手をつけて立位姿勢に移ることができる。 ・立位姿勢の保持は、3秒程度であれば自分自身でバランスをとることができる。支援者の腰の補助や重心の位置を整える補助があれば膝を伸ばして長時間姿勢保持ができる。 ・歩行はクラッチや手すりなど補助具を使っている。前から両手を持って、後ろから上体を支えたりして他者と歩くことができる。また、脚が内転して脚が交差することがある。 ・クラッチ歩行が日常であり、肩や背中など上半身に慢性的な緊張がある。また、姿勢は股関節が屈曲した状態が多く前傾姿勢になっている。 ・足首、脚裏、股関節、背中、肩に慢性的な緊張がある。
コミュニケーション
<ul style="list-style-type: none"> ・自分と相手の関係性を考慮して敬語を使ったり、親しみのある表現で会話するなど対人関係を築くためのコミュニケーションスキルは高い。 ・動作学習を進めていくためのコミュニケーションについては、痛みの程度を数字に置き換えて伝えるなどの手段を身につけている。

(3) 指導内容

動作面の学習目標を達成することができるように以下の課題に取り組んだ。

- ①身体の動きの確認（歩行・膝立ち）
- ②躯幹のひねり（腰・背中・肩周りの弛緩）
- ③股関節の弛め
- ④背そらせ（背中での弛緩）
- ⑤足首の弛め
- ⑥ひざ立ち（姿勢保持）・ひざ立ち歩行
- ⑦歩行
- ⑧学習の振り返り

A児の主体的な取り組みを促すための手立てとして、⑥⑦において膝立ちの姿勢の保持時間と歩行の歩数を表に記録し、過去の記録を可視化できるようにした。

併せて⑥⑦の課題に取り組む際は、「前は○回だったから今回は●回歩けるように頑張ろうね」など、目標を意識するための確認を行った。

また、#6からは家庭での自主学習を習慣化することを目的として、まずは外発的動機であってもホームワークを通じた成功体験や肯定的な体験ができるようにチェックカードを作成し、トークンエコノミー法を取り入れた。実際のチェックカードを図1、図2に示す。

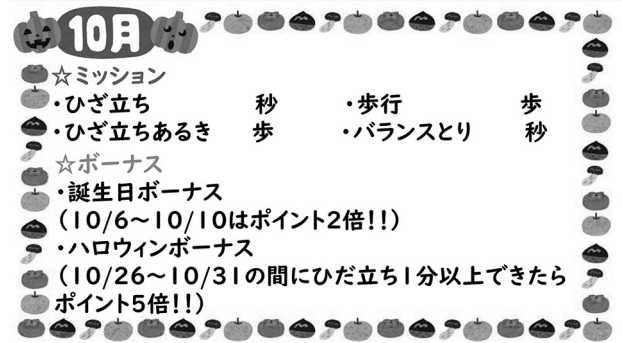


図1：チェックカードの例①

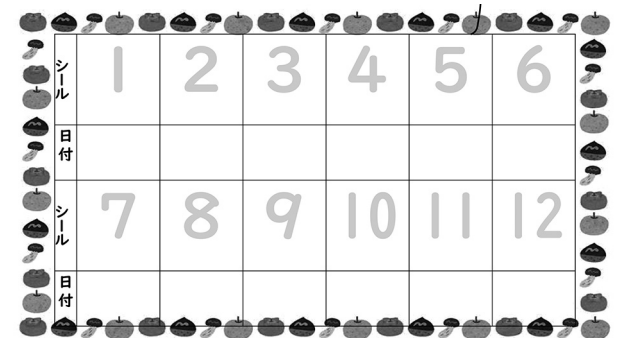


図2：チェックカードの例②

(4) 学習評価の観点

①身体の動きに関する評価の観点

- 1) 膝立ち姿勢の保持時間
- 2) 膝立ち歩きの歩数
- 3) 歩行の歩数

②学習への主体性（動作学習に取り組む態度）に関する評価の観点

目標「課題の目的を理解し、意欲を維持しながら活動に取り組むことができる」については、下記の3つの観点から学習評価を行う。

- 1) 課題の目的を理解することができたか
 - 2) 意欲を維持することができたか
 - 3) 家庭で自主学習に取り組むことができたか
- 評価を実施する際は、以下の情報を用いた。

1) 活動の様子を撮影した映像

毎回映像記録として残した学習活動の様子を視聴し、発言や積極性を評価した。具体的には以下のような内容である。

- ・発言：意欲、理解、指示・要請
- ・積極性：繰り返し取り組もうとする、切り替えがスムーズ、自分から過去の映像を見る、自発的に指導・支援を要請する

2) 保護者への聞き取り

- ・家庭でのホームワークの取り組み状況
- ・A児の身体の動きの変化
- ・A児の動作学習への意識の変化

3) 本人への聞き取り

- ・ホームワークに取り組んでみての感想
- ・年間を通しての身体の動きの変化

Ⅲ. 事例の経過

各期間におけるA児の様子と筆者の取り組みについて述べる。なお、A児の発言は「」、筆者の発言は『』で示している。

1. 実態把握期（#1・#2）

A児の意欲を高めるべく、躯幹のひねりを行う際に気分を高揚させるためのコミュニケーションをとった。最初は気持ちが沈んでいたが、リラックスして学習に取り組む構えができた。

学習の中盤では、取り組む課題の目的を明確にするために、『(股関節を弛める場面で)足首が絡まないようにするためや、地面にまっすぐ立てるようになるためにここ(足の付け根を指して)を柔らかくするよ』と声掛けを行ったが、A児は返事をしなかった。他の課題においても、課題の意図を明確にするための声掛けを行ったが、理解していない様子が見

られた。しかし、過去のA児の歩行動画を用いて説明すると、言葉で説明するよりも歩き方のコツを理解している様子であった。

#2以降は歩行の歩数記録と膝立ちの姿勢保持記録をつけ始めた。可視化することによって、A児の動作学習への意欲を高めることができるのではないかと考えたからである。しかし、A児は記録表にシールを貼ることや秒数を記入することに興味を示さなかった。

2. 第1期（#3～#5）

動作学習の序盤に身体の動きのチェックとして歩行を行っている。この期間、A児の歩行は2、3歩であり、モチベーションを下げた状態で弛め課題に取り組むことが多かった。「あ、やべ、もうバイバイ」など後ろ向きの発言があった。

股関節の弛め課題では、A児が股関節付近に触れられることにまだ慣れておらず(股関節の弛め課題はX年度から取り組み始めた)、また、課題の意図を繰り返し説明しても理解できていない様子であった。

膝立ちでの姿勢保持課題では、記録表の効果が見え始めた。記録表を見ながら、『先週は45秒でその前は35秒だったよ』と声を掛けると、「今日は2分17秒で」と、自主的に目標を立て、目標を達成することができた。しかし、A児の中で、記録を前回より伸ばすことが重視され、膝立ちの姿勢が崩れてしまっているセッションもあった。筆者が姿勢を正しくしようとする、「先生触らないで」と発言する場面もあった。

歩行では、勢い任せで歩く従来の歩き方から、一歩ずつ踏みしめて歩く歩き方に改善するための学習を行った。#5では、歩数の記録は伸びなかったが従来の歩き方よりも改善が見られたセッション(#4)の動画を参考にして歩行訓練を行うと、「ちょっと歩みにくいな」と言いながらも、歩幅を小さくして歩くことができていた。

3. 第2期（#6～#12）

第2期より、家庭学習を設けた。家庭学習の進め方を説明すると、「やり方分かった！家で勝手にする！」という意欲的な発言が見られた。また、ポイントが貯まるともらえるご褒美は保護者と相談し、「焼肉に連れて行ってもらえる」に決定した。

股関節の弛め課題では、これまで股関節に触れることに抵抗感があったので、A児自身で太ももの付け根をマッサージしながら課題に取り組ませた。『そうそう、上手だよ、弛んでいるよ』と声掛けを

すると、「なんかわかる気がする」という発言があった。

背そらせ課題では、「今日は身体柔らかいでしょ。俺わかるよ (#6)」など、自分の身体の状態を理解しているとれる発言があった。他の課題でも、痛みの加減を自分から5段階で伝えるなど、自分の身体の状態をA児自身で言葉にして伝えるという場面が増えた。

膝立ちの姿勢保持課題では、姿勢保持時間を着々と延ばし、#11では10分以上膝立ちの姿勢を保持することができた。

歩行課題では、6歩歩くことができたセッションがあった(#8)。「すごい、どうしたの?」と尋ねると、「わかんないけど足が動いた」と発言していた。この経験が成功体験となり、A児は歩行課題に意欲的に取り組むようになった。「マッサージが終わったらもう一回歩きたい」と発言していたセッションもあった。しかし、久しぶりに動作学習を行ったセッションでは、従来の勢い任せの歩き方に戻っており、「1歩ずつ踏みしめて歩く」という歩き方が習慣化できていないことが分かった。そこで、立位での重心移動の課題を追加した。A児は当初は戸惑っており、「出来ない、疲れた」と発言することもあったが、前向きな声掛けを行ったり、課題に取り組む様子を撮影した動画を見ながら身体の動き方を確認したりすることで、投げやりになることなく、課題に取り組むことができた。

4. 本人・保護者との振り返り

X年最後の動作学習会で、ホームワークや動作学習会の取り組み方について振り返りを行おうと計画していたが、A児が欠席だったため、後日zoomでA児、母親と振り返りを行った。

A児は、「ホームワークでシールが貰えて嬉しかった、歩くのが楽しくなった」と話していた。

家でのホームワークへの取り組みについて母親は、「自分から取り組むこともあったが、怒られてから取り組むことが大半であった。先生(筆者)と話したときはやる気を見せているが、家ではだらけてしまっていた」と評価している。家での動作学習に対する意欲を維持するためには、「A児が将来できるようになりたいことを行うために動作学習に取り組んでいる」という意識づけも必要であることが考えられる。また、将来のイメージを持って動作学習に取り組むと、現在の日常生活でも身体を動かしやすくなると考えられる。

毎週の動作学習会に対してX-1年度よりも意欲的に取り組んでいる様子が見えたと、そのこと

に関して母親は、「X-1年度よりも動作学習会に行くのが楽しみになっていて、先生とお話するのも好きで、楽しいと言っている」と話していた。

身体の動きの変化について、A児は「あまりわからない」と答えた。母親は、「太ももやふくらはぎの筋力がつき、以前よりも安定して姿勢保持ができるようになった」と話していた。

IV. 結果

1. 目標の確認

本研究を進める上で、A児や保護者と相談し、身体の動きと主体性が関連する指導目標を設定した。身体の動きでは、「膝立ち歩きを4歩できるようになる」を設定し、主体的な取り組みに関しては「課題の目的を理解し、意欲を維持しながら活動に取り組むことができる」であった。

2. 動作学習の成果

本事例で実施した全12回の動作学習は、膝立ち歩きと歩行を中心に行った。また、膝立ちについても姿勢の保持時間を記録した。各課題に取り組んだ記録を図3～図5に示す。(なお、A児が参加できた学習時間の都合上、実施できなかったセッションがある。)

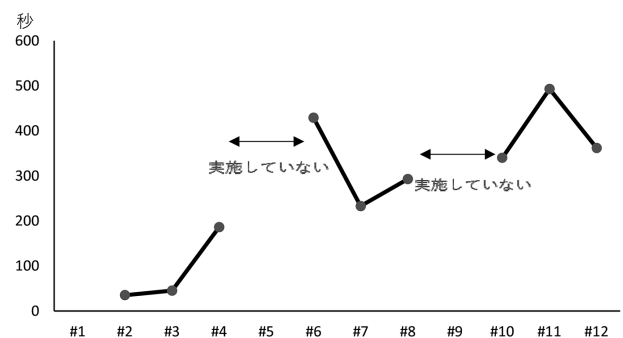


図3：膝立ちの姿勢保持時間の推移

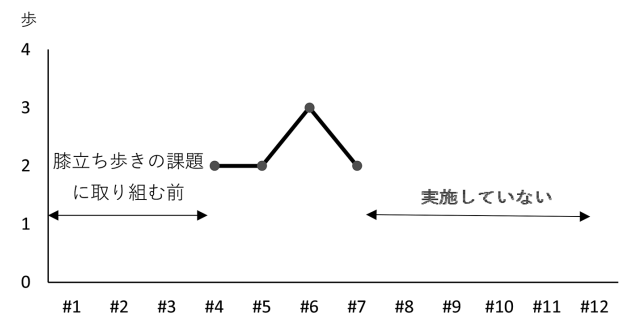


図4：膝立ち歩きの歩数の推移

セッション初期に取り組んだ膝立ち姿勢の保持時間は、35秒（#2）、や45秒（#3）という結果であったが、#4以降は3分以上膝立ちの姿勢を保持することができた。

膝立ち歩きについては、#4から取り組んだ課題であり、本事例研究の中で新しく追加したものである。そのため、一人で膝立ち歩きをする経験がなく、A児は歩き方を理解できていない様子であったので、一人で歩いて歩数を数える課題から、支援者が後ろから補助して少しずつ歩く課題を主として行った。一人で膝立ち歩きをする課題をしたセッションの結果は、2歩（#4、#5、#7）や3歩（#6）」と、変化は見られなかった。

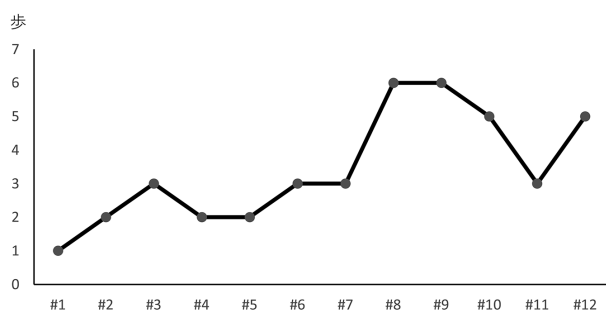


図5：歩行の歩数の推移

歩行について、初めのセッションは2歩～3歩であったが、#8以降記録がのび、6歩歩くことができたセッションもあった。身体の状態（足首がいつもよりかたい）などから記録が伸びない日もあったが、セッション後半では、安定して3歩以上歩くことができるようになった。

V. 考察

1. 身体の動きの変化

膝立ちについて、姿勢保持時間が長くなった要因として3点考えられる。1点目は、タイムアタックを行う前に姿勢の確認を行ったことである。#4からは、姿勢保持の時間を計測する前に姿勢を確認するようにした。2点目は、“太ももとお尻に力を入れるように踏ん張る”のように本人にとってわかりやすく、具体的に意識することができるような声掛けを行った点である。3点目は、#2より膝立ちの秒数を記録し、可視化できるようにした。この記録表を用いて膝立ちを行う前に目標を決めて取り組んだため、“前回の記録を超えよう”というA児の意欲につながったと考えられる。以上の手立てがうまく作用し、長時間姿勢を保持できるようになったと推察できる。

膝立ち歩きについては、#4での課題に取り組むA児の様子と#8での課題に取り組むA児の様子を、それぞれ図6、図7に示す。当初は膝立ちの姿勢をとることができず、床に手を着く場面も多く見られたが、“安定した膝立ちの状態を作り、1歩を小さくして歩く”という一連の流れを意識して取り組むことができるようになった。



図6：#3において膝立ち歩きの課題に取り組むA児

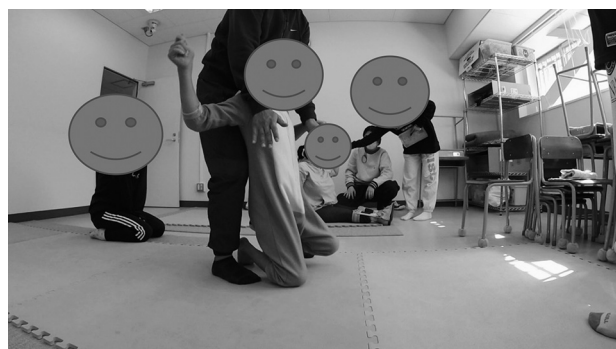


図7：#8において膝立ち歩きの課題に取り組むA児

膝立ち歩きの姿勢について、以前は上体を大きく動かしバランスをとっていたが、太ももで踏ん張る力を立位での足の曲げ伸ばしの課題などで培ったため、上体を大きく動かすことなく、太ももで踏ん張って歩くことができるようになった。#4の発言にあるように、太ももの力が必要であることに気付いたことも、本人の意欲の背景にある要因として考えられる。

歩行については、以前は勢い任せの歩き方であったため、数歩進むとバランスが取れずに手をつけていたが、セッションを重ねるにつれ、安定した歩行ができるようになり、歩行可能歩数も増加した。その要因は2点考えられる。1点目は、小さい歩幅で一歩ずつ踏みしめながら歩く課題を行ったことである。A児の歩行は勢い任せに足を前に出しており、次の足を出す前に重心を整えることと1歩を大きく踏み出すことが改善点であった。そこで、次の足を出す際に姿勢を整え、重心移動をする課題を繰り返し行ったことにより、上体（腕）だけでバランス

をとるのではなく、身体全体でバランスをとることができるようになったと推察できる。2点目は、歩行で意識すること（前を見て歩く、1歩ずつ踏みしめて歩く、等）を確認したり、膝立ちと同様に記録表を作成し、各セッションで行った歩行の記録を可視化できるようにした。以上の手立てが作用し、以前より安定した姿勢で歩行できるようになったと推察できる。

2. 学習への主体性に見られた変化

意欲や主体性に関しても変化が見られた。保護者の話でもあるように、A児はX-1年度よりも動作学習会に行くのが楽しみになっており、A児も“歩くのが楽しくなった”と感している。A児が抱いた“楽しい”という感情は主体性や意欲に大きく関係していると考えており、これは、動作学習会に参加する中で、①コミュニケーションを充実させる、②動作学習の中で“できた”や“楽しい”という感情を得ることができたことが関与していると推察できる。

①について、表1にもあるように、A児はコミュニケーションをとることを好んでいるため、躯幹のひねりや股関節の弛めなどの課題を行う際は、A児の気分を高めるために積極的にコミュニケーションをとるように心掛けた。そうすることで、A児は約1時間の動作学習に楽しみながら取り組めるようになった。

また、コミュニケーションをとりながら、A児が課題の目的を理解することができるように、言葉や動画を用いながら説明した。はじめのセッションでは、動作学習の目的を説明してもA児は理解していない様子であったが、#3では、股関節の弛め方を理解している発言や、#6・#7では自分の身体の状態を理解し、動作学習をどのくらい行えば弛むのか判断したり、#12では、“○○をすると●●ができる”ということを理解している様子が窺えた。

②について、A児は課題ができなかったり、難しいと感じると意欲が低下する傾向がある。そのため複数セッションで、うまく歩けなかった際には意欲が低下していることを表す発言をしている。そこで、まずはA児が“できた”ことを実感することができるような身体の補助や声掛けを意識して行った。例えば、#7では1歩しか歩けず意欲が低下しているA児に対し、先ほどの歩行でよかった点を伝えると、「もう一回歩く」とやる気を見せている。何度も課題に挑戦し、成功体験を積むことで、A児の意欲の向上につながっていると考えられる。歩行の歩数の記録が伸びている#7では、「先生もっとたく

さんマット敷いて」という歩行に対して意欲的に取り組もうとする発言が見られる。

繰り返し“動作学習に対して難しいと感じると意欲が低下する傾向がある”と述べたが、難しい動きであっても、自分が“楽しい”あるいは“達成できそう”と感じた動作学習には意欲的に取り組もうとすることが分かった。#9では、新しく行った課題を苦戦しながらも楽しんで取り組み、「宿題でしたい！」とホームワークにおいても意欲を示していた。

意欲の向上に関連して、#7では、「俺高校生になったら一人でP大学まで来れるようになりたい」といったようなA児がやってみたいことなどの将来のビジョンについて話していた。A児はこの発言をきっかけに、車椅子ユーザーの肢体不自由者と話す機会を持ち、A児は将来の生活について、考えることができたと考えられる。このような経験を積むことで、将来のビジョンをより詳しく見据え、動作学習に活かすことができるようになると考えられる。

3. 本研究のまとめ

本研究を踏まえ、課題の目的を理解し、主体的な取り組みを促すために必要だと考えられるポイントは、以下の3点である。

(1) 本人が理解し見通せるように説明する

動作学習の目的を説明するにあたって、課題に取り組みながら言葉や動画を用いてその場で伝えたり、目標を一緒に考えながら説明することで、動作学習への価値づけをすることができる。

(2) 成功体験を積む

A児の場合、課題ができると思えないと発言が後ろ向きになる傾向にある。その要因として、本人の中で達成のイメージが持てていないためだと考えられる。そこで、“できた”と思える体験を積み、“もっとやってみたい”という意欲につなげることが重要である。そのために、支援者は身体の補助や言葉、動画などを用いて成功イメージや成功体験につながるような支援をする必要がある。

(3) 学習活動の雰囲気づくりをする

先ほども述べたように、A児の場合、難しい動作学習に取り組んでいる際も、楽しい雰囲気があると意欲は維持される。楽しい雰囲気づくりをするために具体的な手立てとして、話題やホームワークのチェックカードを対象者・児の興味や関心に合わせる、“できそう”、“今までにない体験”などの期待感が高まるような体験を準備することなどが考えられる。また、コミュニケーションをとる際には、関わり合いを楽しむ心構えを持つことも重要である。

VI. 今後の課題

1. 実践上の課題

身体の動きに関する今後の課題について、膝立ち歩きと歩行の観点から述べる。

膝立ち歩きについては、図7より、膝立ち歩きをする際の姿勢は良くなったことは確認できるが、片足を前に出す際に重心移動がうまくできておらず、反りの姿勢になっている。今後は立位での重心移動の課題に加え、膝立ちの姿勢で重心移動の課題に取り組むと、上体を大きく動かすことなく膝立ち歩きが可能になると考えられる。

また、膝立ち歩きは、本事例研究の中で新しく追加した動作学習である。そのため、歩行や膝立ちと比較して経験も浅く、成功体験が少ないことが考えられる。“膝立ち歩きで歩けた”という経験や、動画を見て“こんなに歩けるようになったんだ”という成功体験を増やす必要がある。

歩行については、さらに歩数の記録を伸ばすためには、バランスをとって踏みしめながら歩くことが必要である。そのために、立位での脚の曲げ伸ばしの課題で足首を柔軟にしつつ繰り返し体重を支えるための力をつけ、踏みしめの動作学習では、前後左右の踏み分けができるようになると、さらに歩けるようになると考える。A児はクラッチを普段から使用しており、身体のバランスが崩れるとすぐに手を前に出して安全に倒れるための準備をする習慣がある。そのため、重心の位置を安定させるための動作学習は特に重点的に行いたい。重心移動がある程度できるようになったら、足裏で踏みしめられる範囲を広げるための踏み分けの課題にも取り組みたい。

目的を理解して動作学習に取り組む姿勢については、動作学習に取り組みながら言葉や動画を用いてその場で説明することを継続的に行いつつ、A児の目標ややってみたいことなど具体的な将来のビジョンと動作学習の目的を関連させて動作学習に取り組みたいと考えている。

また、次年度からは1年間の目標を可視化できるようにし、動作学習に取り組む前に随時確認をしたいと考えている。目標を可視化した上で、自分自身で設定した目標と課題の関係を意識しながら動作学習に取り組むたい。

意欲を維持することに関しては、ホームワークに取り組む姿勢について課題が浮き彫りとなった。ホームワークの取り組み状況について詳しく把握することができるのは動作学習会の時だけであるので、確認できない期間のホームワークの管理は保護者に委ねられる状況となる。また、10月から3か月間、ホー

ムワークを実施したが、ご褒美がもらえるポイント数まで達した月はなかった。しかし、次年度にもホームワークは取り組んでいきたいと本人から要望があったので、月ごとに配布するのではなく、ポイントが貯まったら次のカードを配布するという形式をとり、“ポイントを全部貯めた”という成功体験をすることが必要であると考えた。

しかし、ホームワークのご褒美はあくまで外発的に動機づけているものである。目的を理解して動作学習に取り組むことを関連付けて、A児が動作学習の必要感を感じることができるよう手立てを講じることが課題である。

2. 研究上の課題

本事例では、肢体不自由児への主体的な取り組みを促す動作学習の指導実践について研究した。本研究の成果をより良いものにするためには、目標設定や活動計画に本人が参画できるような指導の在り方や、習慣化のための支援・指導の在り方についての研究を継続する必要がある。習慣化に関しては、早期から（小学部や中学部）習慣化するためにはどのような手立てが効果的であるのか、保護者との効果的な連携方法など、事例研究に取り組み、モデルとなる情報を増やしていきたい。

VII. 引用文献

- 安藤隆男, 藤田継道 (2015) やわらかアカデミズム・〈わかる〉シリーズ, よくわかる肢体不自由教育, ミネルヴァ書房, 26-27.
- 文部科学省 (2018) 特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 自立活動編 (幼稚園・小学部・中学部)
- 中井滋, 高野清 (2011) 特別支援学校 (肢体不自由) における自立活動の現状と課題, 宮城教育大学紀要, 46, 173-183.
- 成瀬悟策 (1995) 講座・臨床動作学 I 臨床動作学基礎, 学苑舎.
- 徳永豊 (2018) 自立活動の指導法3, コミュニケーションの指導と評価, よくわかる肢体不自由教育, ミネルヴァ書房, 146-147

VIII. 付記

本研究は令和4年度熊本大学教育学部特別支援教育教員養成課程卒業論文の一部を加筆・修正したものである。本論文の執筆にあたり、ご快諾をいただきました。A君と保護者様に感謝を申し上げます。